山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター　研究紀要13　1997年　pp47～57

『考古資料の教材化についての一考察』

大　庭　　勝

1　はじめに
2　考古資料を教材化する意義について
3　考古資料を活用した指導案
4　今後の展望
5　おわりに

1　はじめに

山梨県埋蔵文化財センターでは、県内の公立学校から異動してきた教員が数十名勤務している。学校の現場とは違った環境の中で戸惑いながらも、私たちは考古資料教材研究会を結成し、考古資料を授業実践で活用方法などを研究している。

県内では、毎年多くの発掘調査事業が各地で行われている。それに伴う、多くの考古資料が当センターに収蔵されている。それらの多くの情報は、調査報告書として各研究機関に提供されるわけだが、一般の人々、とりわけ県内の小中学校、高等学校の教員の目に触れにくいものである。

しかし、私たち社会科の教員にとって考古資料は魅力的な教材の一つである。教科書や資料集に掲載されている写真を見るよりも実際に考古資料を手に触れてみることで、子供達の好奇心を喚起することができる。また学習意欲を促すものになりうる教材だと思われる。

しかし考古資料を教材として授業実践の場で活用するには、考古学的な知識を知っておく必要があろう。だが、学校現場においては考古学に関する情報が得にくいため、積極的に活用するに至っていない状況と思われる。

こうしたことをふまえ、本論では考古資料を活用する指導案を提示し、考古資料の教材化の意義、学校教育と埋文センターとの協力関係のあり方と展望につてい提言したいと思う。

2　考古資料を教材化する意義について

文部省では平成元年度に学習指導要領の改訂を行い、平成５年度から施行されている。中学校社会科の学習指導要領では、歴史的分野の目標に「国家・社会及び文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を、その時代や地域との関連において理解させ、尊重する態度を育てる。」[1] とあり、また「具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味や関心を高め、様々な資料を活用して歴史的事象を多角的に公正に判断する能力と態度を育てる。」とある。また、「内容と取り扱い」においても「考古学などの成果を活用して生活の有様を理解させる」とある。このことから、各時代の政治や社会の動きだけでなく、民俗資料や考古資料などの活用し身近な地域の博物館や郷土資料館、文化財の調査・見学によって、日本人の生活文化の展開を具体的に学べるようにすることが求められている。

また、学校現場においては「問題解決学習」の重要性が叫ばれている。そもそも学習は「学

習とは学習者自ら刺激を与え、自ら目的と方法を定め、社会に依拠して社会的自我の向上と社会文化の創造とをはかっていく作用である。」[2] ものであるが、受験やカリキュラムの厳選などで時間的に余裕がなく、本来のあるべき学習のスタイル（生徒・児童が自ら問題意識を持って調査したり、考えたりする学習）が確立しにくい現状である。教員の中では、教材研究をしたくても、学級経営・部活動・生徒会指導・様々な事務処理と、それぞれ多くの校内分掌を抱えており、なかなか時間的な余裕がない。特に考古資料を教材化するには、考古学的な専門知識をあらかじめ勉強しなければならない。ただ縄文土器を子どもたちに見せても、授業を深めることができない。「縄文土器の形の違いは？」や「縄文土器の文様の違いは？」といてような学習課題を設定したとき、縄文土器の地域的分布圏や編年表をあらかじめ調査しておかなければならない。こういったものは考古学専門書や論文集を読まなければならないが、これらの書籍は専門的に記述されていることが多く、教員が教材研究をするのに難しい。

また教科書や資料集に掲載されている考古資料はせいぜい代表的なもので、縄文時代であったら千葉県賀曽利貝塚や弥生時代であったら登呂遺跡、前方後円墳であれば仁徳陵であったりする。子どもたちの多くは、自分が住んでいる県内に縄文時代の釈迦堂遺跡や甲斐銚子塚古墳が存在することをしらないことが多い。[3]

しかし小学校学習を中心に1980年代から、身近なものから学習するという立場から自分たちの住んでいる地域の暮らしの現状や変遷、問題点などを考えさせる方法が試みられている。とくに地域の人々の生活史や文化史を考えさせる学習指導には文化財の調査が欠かせないものとなっている。[4]

また考古資料は子供たちの興味関心を強く引きつける教材であるといえる。平成７年６月に山梨県東八代郡の八代小学校の６年１組の児童が中巨摩郡櫛形町村前東遺跡に見学に訪れたことがある。遺跡の見学と発掘調査の体験を行った子供たちの感想である。

※暑い、立っているだけでも大変なのに、いつもこんな中で働いているのはすごい。土器や家の跡がどのようにでるのか、勉強になった。（女子Ｋ）
※いろいろな形の土器の使い方を教えてもらえてよかった。発掘調査を実際に見せてもらってよかった。発掘が楽しかった。（女子Ｏ）
※竪穴住居の跡がいっぱい残っていて、火災にあった住居の中に土器がいっぱい掘ってあっていました。実際に掘ってみて小さな土器を見つけたとこはうれしかった。（女子Ｎ）
※土器の説明や土器にさわられてくれてとてもうれしかった。実際に掘っているところや土の地層を調べてくれたりしてすごいと思った。土器を見つけて楽しかった。（男子Ｉ）
※生まれて初めて遺跡を掘りました。地面を掘ってみると土がとても硬かった。そして地面に大きな穴がいくつもありました。とてもいい勉強になった。（男子Ｏ）
※発掘現場に着くと大きな穴が何個もあって、竪穴住居がいっぱいありました。まず土器を見つけ、次にいくつか遺跡を見学し、それから遺跡を掘ることになりました。大きな土器を見つけてやろうと思ったのですが、なかなか見つかりませんでした。暑い中、現場の人たちは大変

だなと思いました。(女子N)
※現場に到着してから、遺跡の話を聞いて土器の説明をしてもらいました。次に発掘の見学をして自分たちで掘ることになりました。私は自分で発掘することがとても楽しかった。(女子O)
※発掘現場をみてすごいと思いました。家の跡をみられてよかった。土器は見つけられなかったけど、いい勉強になった。(男子A)
※私は初めて発掘現場に行きました。作業員のおばさんが穴を掘っていました。発掘体験は大変で、一つも土器を見つけられなかったけど、おもしろかった。(女子K)
※発掘現場の土器の掘りかたや、竪穴住居の跡がはっきりとわかり、昔の人がどのように生活しているか教科書での勉強よりいっそうわかりました。土器の発掘もすごくいい体験になりました。(男子M)
※私は土器を楽しみにしていました。でも土器を見つけられるかどうか心配でした。私は見つけられなかったけど楽しくできたからよかった。いい勉強になってよかった。(女子M)
※一番楽しかったのは、土器を掘ることでした。とても楽しかった社会科見学でした。(女子H)
※かなり発掘は大変そうだったけど、夏暑くなってもがんばってください。(男子I)
※私はいろいろ土器をみて、発掘現場をみて、そして楽しみにしてきました。(女子Y)
※地面を少し掘りながら、土器発掘するのが大変だと思いました。(男子A)
※竪穴住居の跡がいっぱいあって驚きました。一つの家に4～5くらいの柱の穴があって、その穴が大きかったのに驚きました。土器を掘ってちゃんと見つかったのがうれしかった。(女子N)
※発掘がどうやっているのかがわかった。実際に発掘ができたのでよかった。土器は二つ見つけられてよかった。もっと見つけたかった。竪穴住居の跡もみられてよかった。これからの勉強にとても役に立ったと思う。(男子K)
※昔の人々の様子や竪穴住居の形がそのまま残っていてびっくりしました。土器の発掘ができてとても楽しかった。(男子B)
※はじめに、僕たちは土器の説明を聞きました。昔は今と違って鍋やお酒を入れるものは土器だと聞いた。そしていよいよ土器を見つけるときがきた。一生懸命掘った。でも小さい土器が一つだけ見つけられた。とても勉強になりました。(男子W)
※発掘現場の人たちに土器はどのように使っていたのか教えてもらいました。発掘をしているところをみて、どういう風に発掘されているかが、わかりました。とてもよかったです。(女子I)
※実際に掘ってみて土器がでてくるとは思いませんでした。土器の使い方がわかってよかったです。(男子W)
※暑くて発掘現場の人たちはとても大変そうだと思いました。発掘現場の人たちにわかりやすく説明してもらってよかった。私は発掘調査が初めてなので、とてもびっくりしました。社会

勉強に役立てたいです。（女子Ｉ）
※生まれて初めて発掘調査をこの目で見ました。土器のことを詳しく教えてくれたり、掘っているところをみたり、いろいろなことを教えてくれました。結構勉強になりました。掘るときはあんまり土器を見つけられなかったけど、ここへきてよかった。（男子Ｎ）
※体験発掘で、あんまり土器を見つけられなかったけど、とてもたのしかった。（男子Ｄ）
※昔の人の家の跡などが見て、はっきり残っていてびっくりしました。土器などがたくさんでてきたりして、形もそのままでてくるものもあってすごいなと思いました。最後は自分たちで土器を見つける体験発掘でした。ほとんど見つけることができなかったけど、すごくいい勉強になった。（女子Ｏ）
※私は初めて発掘調査をしました。土器を拾ったことがあったけれど、発掘した方が楽しかった。どのように発掘しているのかはわかりませんでしたが、何千年もそのまんまで残っているなんてすごかったと思います。親切にしてくれてよかった。（女子Ｉ）
※この現場で、住居の大きさや発掘の体験できたりしました。土器の工夫やおゃれをしたこともわかりました。僕は発掘したときに、４つの土器のかけらを見つけることができました。中には大きな土器を見つけた人や土器がくっついた人もいました。またこのような体験をしたいです。（男子Ｍ）

発掘調査現場を見学して、竪穴住居跡に興味を示す児童や、土器の形や使い方に祖先の工夫に感心する児童、また体験発掘では実際の土器に触れることに感動する児童など見受けられる。教科書や資料集に掲載されている土器や住居跡の写真をみるよりも、自分の目の前にある実物を見たり、触れたりするほうが子供の興味関心や学習意欲を喚起するといえよう。八代小の子どもたちは、自分の住んでいる山梨に村前東遺跡のような大規模な遺跡が発掘された事実をしっていたのだろうか。おそらく多くの子どもが山梨の遺跡を見学した経験がないものと思われる。教科書に載っている有名な遺跡ならしっているかもしれないが、それすら遠い時代の、自分たちの世界とは別世界の特別な場所というイメージが強いのではないだろうか。もし自分たちの身の回りに教科書に載っているのと同じような（同じ時代の）遺跡があるということになれば、遺跡に対する子どもたちの親しみもわくのではないだろうか。

写真１　見学会風景（経塚古墳）

また、古代の部分は歴史的分野の最初の単元であり、歴史学習の導入部である。大切なスタートの時期だけに、ここにおける授業がつまらないと、歴史学習に対する興味関心ややる気を失わせ、歴史嫌いを作ってしまうおそれがある。子どもたちの個性や環境を考慮し、歴史を自

分たちの身の回りの事実して具体的にとらえさせるには、教科書の記述だけでなく、自らが体験学習したり、身近な地域の考古資料を教材に取り上げる必要があると思われる。

以下の点をふまえて、曽根辰雄氏は、子どもの立場から見て考古資料を教材として活用する時の利点はつぎのようになると論じている。

自分の目でみて、手で触れることができる。調査することができる。
（観察する力）

見てきたこと、触れてきたこと、調査してきたことをまとめたり、表現したりすることができる。　（表現する力）

自分たちの生活との関わり合いにおいて、地域の歴史・社会をとらえることができる。[5]
（地域性・生活性）

このように考古資料は子どもたちに歴史を身近な、自分との生活との関わりから考えさせる教材であるといえよう。

3　考古資料を活用した指導案

考古資料を活用するにあたっては、いくつかの点で留意しなければならないと思われる。まず、ひとつは考古資料の知識の普及をねらった学習ではなく、子どもたちが考古資料を活用し、自らの問題意識をもって、学習育成をはかれるようなものにしなければならない。そのために、『教師の側では授業の展開において「知る→分かる→考える」の課程を明確に意識しておく必要がある』[6]と思われる。

まず「知る」の段階では、自分たちが住む郷土にも文化財の存在を気づかせ、教科書や資料集と同様の歴史が存在していることを気づかせたい。

「分かる」の段階においては、その文化財と自分たちの住む郷土の歴史や社会、そして自分たち自身の生活との関係を認識させたい。「考える」の段階では、文化財を自分なりの一定の価値判断を考えさせたい。なお対象学年は中学校社会の歴史的分野（中学１年・２年）としたい。授業は地域の学習の一環として考古資料を生かしたい。また学習課題については、生徒がお互いに考え、課題を追求する場面を作り出したい。以上のことを踏まえ、学習指導案であるが、本論では縄文時代の社会を取り上げている。

(1)　縄文時代の生活（Ⅰ）

Ⅰ．題材名「自然環境の変化と人類の新しい生活」

Ⅱ．授業のねらいと教材観

本時では、考古資料として山梨県大月市塩瀬下原遺跡から出土した縄文土器・石皿・石鏃を取り上げる。本時の目標は、塩瀬下原遺跡の発掘調査をとおして、縄文土器・石鏃・石皿に着目させ、その道具としての機能について考え、学習課題『縄文土器・石鏃・石皿が縄文時代に

登場したのはなぜだろうか。』に取り組みことによって、自然環境の変化が、人類の生活を変えていったことを理解することである。本時の授業のポイントは、氷河期が終了して世界の自然環境が大きく変化し、それにともない人類の道具も大きく変化したことである。道具は人類の生活に欠かせないものであり、道具がその社会を映し出しているといえよう。

日本では、氷河期の時代に人類が生活していたことが考古学の発掘の成果によって判明している。打製石器を使用し、マンモスやおおつのじかなどをとらえ食料としていたことがわかっている。氷河期が終わり、地球の気候が温暖化してくると、自然環境も大きく変化していく。マンモスなどの大型のほ乳類は絶滅し、それにかわってしかやいのししなどの小型のほ乳類が登場する。また植物の環境も大きく変化した。日本全国に分布していた針葉樹林は北海道地域にまで減退し、かわって落葉広葉樹林や照葉樹林が分布する。くるみ、どんぐり、くりなどの木の実がとれるようになり、この自然環境の結果、比較的安定した狩猟採集経済が成り立つようになる。これにともない人類の道具にも大きな変化が生まれた。狩りに使われていた道具は大きなものから石鏃のような小さなものになる。石鏃は矢の先に取り付けられたもので、この細石器の登場は弓矢という新しい道具を使う狩猟がおこなわれていたことを示唆している。また縄文土器が登場する。縄文土器によって、渋くて食べられなかった木の実を灰汁抜きできるようになり、また食べ物を煮て食べることができるようになったので、栄養をとりやすくなった。また、石皿などの磨製石器が登場した。石皿は木の実を粉にしてすりつぶすためにつかわれたと思われる。

縄文土器・石鏃・石皿などの新しい道具の誕生の背景には、地球規模の自然環境の変化によるものであろう。環境の変化にあわせて、人類の生活が新しい生活を始めたことを本時で理解させたい。

Ⅲ．学習指導案

① 本時の目標

大月市梁川町塩瀬に位置する塩瀬下原遺跡の発掘調査によって出土した縄文土器・石鏃・石皿を観察させ、その機能について考え、学習課題『縄文土器・石鏃・石皿が縄文時代に登場したのはなぜだろう。新しい道具が登場したのはどうしてだろう。』に取り組むことによって、自然環境の変化が人類の生活を変えていったことを理解する。

② 活用する考古資料

塩瀬下原遺跡から出土して縄文土器・石鏃・石皿を観察する。

③ 展 開

＜学 習 活 動＞	＜留 意 点＞	＜資 料＞	＜形 態＞
1．土器・石鏃・石皿を提示する。 『これは縄文時代の人々が使った道具のいくつかですが、これらの道具はどうやって使ったのでしょうか。』	予想される反応 ●土器は食べ物を煮たりする。 ●石皿は木の実をすりつぶして、粉にしてねったりする。 ●石鏃は、矢の先に使って、小さな動物を捕まえる。	土器、石鏃、石皿の遺物	グループ

2．学習課題を提示。 『土器や石鏃、石皿が縄文時代に登場したのはなぜだろう。』	予想される反応 ●土器は、木の実を煮たりするのに使ったのですが、木の実がたくさん採れるようになったから。 ●大きな動物が死に絶えて、小さな動物が増えた。小さな動物は動きが早いので、弓矢で捕まえるようになった。 ●木の実をすりつぶして食べられることがわかった。		グループ
3．縄文時代の自然環境を説明する	主な内容 ●旧石器時代の自然環境 ●縄文時代の自然環境	O．H．P	一斉
4．学習のまとめ	●自然環境の変化によって新しい道具の登場と人々の生活が変わったことを言及する。		一斉

④　授業の構想

授業の導入の部分では、出土した遺物の実物を観察させたい。また可能ならば実物を実際に手に取らせて、子どもたちの学習意欲を喚起させたい。出土遺物の貸し出しは山梨県考古博物館で受付をおこなっている。遺物は長い間土の中に埋もれていたので大変壊れやすいので取り扱いは特に注意する。遺物の中には県内でも出土例がめずらしいものは、手に触れることができないものもあるので、山梨県考古博物館の担当者との打ち合わせも必要であろう。遺物の名称は子どもたちにあらかじめ知らせておいて、それぞれの遺物の用途を考えさせたい。この時はグループで話し合い、出てきた意見を代表者がまとめて発表し、それを板書してまとめる。板書から、すべての遺物が食料に関わってくることに注目させる。

次に学習課題を提示する。これもグループ学習を利用しておこなう。グループで推理した内容を代表者が発表し、板書にまとめる。ここでは、大きな動物が絶滅し、小動物が登場したことと、狩りの道具がそれに伴い小型化したことや木の実が採れるようになったこと、それに伴い縄文土器でどんぐり類などの木の実を灰汁抜きしていたことや、石皿ですりつぶしてクッキー状にして食していたことなどに触れ、これを旧石器時代と比較させて考えさせたい。ここで縄文時代と旧石器時代と食べ物が違うことがわかる。この違いが縄文時代と旧石器時代の自然環境の違いに起因しているが次の説明でわかる。

説明ではO．H．Pをつかって旧石器時代の自然環境と縄文時代の自然環境の変化を説明する。シートは旧石器時代と縄文時代の植生分布図を用意する。旧石器時代には針葉樹林が日本列島を覆っていたが、縄文時代になると西南日本には照葉樹林が回復し、中部・東日本には落葉広葉樹林帯が回復してきたことがわかるようにする。地理の学習での知識を活用しながら旧石器時代に寒かった地球の環境が、縄文時代になって温暖化したことを理解させたい。

最後に授業でわかったこと、感じたことを各自ノートでまとめさせたい。

⑤　授業の評価

●土器・石皿・石鏃の使用方法や工夫を理解することができたか。（分かる段階）

●身近な地域に遺跡（塩瀬下原遺跡）が存在し、これを興味をもって調べることができたか。（知る段階）

●旧石器時代と縄文時代の道具の変化と自然環境の変化を関連づけて、論理的に考えることができたか。（考える段階）

4　今後の展望とまとめ～学校現場から要望をまとめて～

研究会では、山梨県内の考古資料の教材化について研究し、平成3年度から、年に一冊、『先生のための考古資料集』という手製の冊子を各小・中・高等学校に配布してきた。毎年学校現場の授業実践に教材として、また授業の話材として活用できるように編集されているが、学校現場でそれがどれだけ役立つのか、また山梨県埋蔵文化財センターで発掘されている考古資料が、学校教育にどれだけ利用されているのか、また学校現場の山梨県埋蔵文化財センターに対する要望などを十分に把握していなかった。そこで、山梨県埋蔵文化財センターの佐野和規氏が各小・中・高等学校にアンケート調査をおこない、学校現場における考古資料の利用状況を分析している。また平成8年にもアンケート調査をおこない、山梨県埋蔵文化財センターに対する学校現場の要望をまとめている。ここでは、その要望をここで紹介し、今後の学校現場と埋蔵文化財行政との関係を考察したい。

◆小学校での要望（原文のまま）

・歴史教材を地域素材から求める方途は、より身近に歴史をとらえるうえで有効かと思う。実践事例の積み上げで現場とともに図っていただきたい。

・自分たちの身近な考古学の資料が、教材用として作成されることは、大変意義のあることです。さらに、学年差に応じた資料がありましたら、現場に活かして行きたいと思う。

・出張教室（授業）のようなシステムがあるとよい。

・今後も授業で使える資料作りをお願いしたい。

・考古学遺跡の地図、施設の紹介と利用手続きの一覧などを作っていただきたい。

・以前、土器づくりを授業でするに当たり、資料をいただいたりご指導をいただいたりして助かりました。しかし、なんとなく質問や問い合わせが気軽にできずにいます。授業をするうえでのアドバイスをいただきたいと思います。

・写真等を多く取り入れ、さらに読みやすく見やすい本を作ってもらいたい。

・遠足時など、１～２時間くらいでできる体験学習（火おこし・ミニ土器づくりなど）をする機会を増やしてほしい。

・県内の発掘現場や畑から何げなく出てくる土器、その土器の模様を見ただけでおよその年代が分かるなんてすばらしい。そこで県内の土器文様の年代識別表などがあったらと思う。

・こうした資料（先生のための考古資料集など）をさらに幅広くまとめていただきたい。
・こどもたちにとってできるだけ身近な（また、歴史に興味を抱けるような）情報を知らせてほしい。
・映像による資料があれば大変ありがたい。
・教師の立場からすると、地域ごとの資料集があると教材化しやすい。
・現在の県内のあちらこちらで行われている発掘などの状況をもっと教えてほしい。
・（大月市内の都留高校でも行っているようですが、周辺道路が通行しにくくなっていることなども一般にもっと情報を出すべきだと思う）
・見学や体験をどこでできるのか情報がほしい。
・６年生の担任になったらぜひ竪穴住居を作ったり、まいきり式火おこし器で火おこし体験をさせたいと思っている。そんなとき相談に乗っていただき、ご指導いただきたい。
・学校へ来ていただいて直接子供達に指導していただくこともできるでしょうか。
・５年に一度ぐらいでもいいから、写真（カラー）入りの冊子にするのは無理か。
・富士川の流路の変更と、それによって滅んでいった村、氏族を調べてください（特に田富町周辺）。
・小学校周辺の情報があればと思います。
・なるべく新しい情報を知らせてもらいたい。
・各地の遺跡や資料について、Ｂ４一枚のデータベースを作っていただき、冊子（できればＣＤ）のデータとして集積し、授業に活用できるようにしてもらいたい。
・対象を小学校にしぼった内容の資料集がほしい。
・今回のように学校にアプローチしていただくことは、有意義なことだと思います。埋蔵文化財センターにお願いして、発掘体験、現場見学もさせていただき、児童も大変学習になった様子でした。見学や体験をどこでできるのか情報をいただければ。

◆中学校での要望（原文のまま）
・考古学情報（学校から身近な発掘現場や調査見学会など）を知らせてほしい。
・来年もぜひ送ってもらいたい。
・考古資料集のような本を今後も作っていただきたい。
・発掘されたものを、学校現場でも見ることができるようにしてもらいたい。
・土器や火おこし器などさまざまな道具の作り方や竪穴住居の作り方の講習会を、県教育センター研修（総合教育センターのこと？）の講座の一環として開けるよう県教委に要請してほしい。
・一時間の授業の中で「郷土の考古資料」の使い方を集めたものを作ってもらいたい。
・学習効果がある考古資料の実践をどんどん紹介してほしい。
・簡単に使用できる大きな絵（パネル）などを安価で販売してもらいたい（例えば、予想図・遺跡・写真などで、基本的事項をおさえるための視覚的、即物的な資料）。

・関東近県の肺臓文化財の一覧等、県外の文化財を見学する資料がほしい。

◆高等学校（原文のまま）
・今、日本の考古学で何が論議されて入るのか知らせてほしい。
・土器製作の講習を学校へ出張してほしい。
・見学会等の情報を知らせてほしい。
・新しい情報があれば、パンフレットなどでもよいから早目にほしい。
・カラーの写真、できれば大判のパネルの用なものを作成して各校に配布してほしい。

これらの要望をまとめると、小・中・高等学校に共通している点は、もっと地域に密着した情報が欲しいことである。現在、発掘調査の情報提供は調査報告書や山梨県考古博物館が刊行しているパンフレットや考古資料教材研究会が発行している『先生のための考古資料集』などがあるが、調査報告書は前述しているように、専門的に編集されており、考古学の専門的知識が無いとこれを読んで教材研究するのは難しいであろう。また、パンフレットや『資料集』は比較的一般向けの記述がされているが、たとえば、○○小学校の周辺に点在する遺跡というような編集や東八代郡に点在する遺跡地図といったような学校現場向けの編集をしてもいいだろうと思う。

また、土器などの出土遺物の実物を入手しにくいという意見もみられた。考古資料の貸し出しなどは山梨県考古博物館や山梨県埋蔵文化財センター、各市町村の教育委員会で正式な手続きをおこなえばよいのだが、その手続き方法の情報を提供して欲しいという要望もみられた。また土器制作などの実習をおこないたいのだが、その技術を提供して欲しいという要望も多く見られる。

さらに教師に対する研修制度を望む意見もあった。授業で火おこしの実験や土器作りなどおこなう場合、それに対するノウハウを学びたい教師も多数いることがわかった。このような要望を我々埋蔵文化財の発掘調査に携わる者は把握しなければならないであろう。もっと学校現場の教師と協力し、子どもたちがどんなことを知りたいのか、どんなことを疑問に思っているのか、また、どんな情報を知りたいのか、ともに考える必要があるのではないか。

5　おわりに

以上、考古資料を教材化する意義と考古資料を活用した学習指導案、そして学校現場での要望をまとめてみた。授業実践で考古資料を教材として活用するには、今後の情報交換が必要であろう。また文化財保護の啓蒙活動も、考古資料を活用した授業の中で、おこなえるのである。そして生きた歴史授業の創造のためには、発掘調査に携わる者と学校教育に携わる者との、お互いの協力・情報交換をもとに、身近な地域の考古資料を教材化し、それを子どもたちに還元していくことが必要であろう。

注

1）平成元年度文部省編『学習指導要領社会科編』

2）木村竹治『学習原論』より。中野光編『世界教育学選集64』（1972年・明治図書出版）所収

3）1996年山梨県埋蔵文化財センター『研究紀要12』のなかで、佐野和規氏が県内の公立中学校・高等学校の生徒340名に対しておこなったアンケート調査をおこなっている。その結果、全国的に著名な遺跡を1つ以上指摘する生徒は246名に対して、県内の遺跡を1つ以上指摘する生徒は68名と約80パーセントの生徒が県内の遺跡を知らないことを指摘している。

4）曽根辰雄「小学校学習における子どもと文化財―小学校社会科文化財学習の成立と実践―」『静岡県埋蔵文化財研究所設立10周年記念論文集』所収のなかで、静岡県内の文化財を活用した授業実践が紹介されている。

5）曽根辰雄「小学校学習における子どもと文化財―小学校社会科文化財の成立と実践―」『静岡県埋蔵文化財研究所設立10周年記念論文集』所収から引用。

6）曽根辰雄「小学校学習における子どもと文化財―小学校社会科文化財の成立と実践―」『静岡県埋蔵文化財研究所設立10周年記念論文集』所収から引用。

参考文献

・横山秀明「社会科学習指導案」『静岡県埋蔵文化財研究所設立　10周年記念論文集』所収
・池ヶ谷清「学習指導案「古代の生活」―上土遺跡の発掘調査をとおして―」『静岡県埋蔵文化財研究所設立　10周年記念論文集』所収
・曽根辰雄「小学校学習における子どもと文化財―小学校社会科文化財学習の成立と実践―」『静岡県埋蔵文化財研究所設立　10周年記念論文集』所収
・澤登正仁　1996「歴史教育実践と考古学の関連について」山梨県埋蔵文化財センター・山梨県考古博物館『研究紀要　12』所収
・佐野和規　1996「山梨県内考古資料の教材化―学校現場へのアンケート調査に基づいて―」山梨県埋蔵文化財センター・山梨県考古博物館『研究紀要　12』所収
・渡辺誠　1983『縄文時代の知識考古学シリーズ４』東京美術
・麻生優・白石浩之　1986『縄文土器の知識Ⅰ　考古学シリーズ14』東京美術
・文部省編　1989『学習指導要領　社会科編』
・文部省編　1989『高等学校学習指導要領解説』地理歴史編　実教出版
・西川宏　1986『学校教育と考古学』『岩波講座　日本考古学７　現代の考古学』岩波書店